

仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

青空文庫

僕は中学五年生の時に、ドオデエの「サツフォ」という小説の英訳を読んだ。もちろんどんな読み方をしたか、当てになつたものではない。まあいいかげんに辞書を引いては、頁ページをはぐつていっただけであるが、ともかくそれが僕にとつては、最初に親しんだ仏蘭西小説フランスだつた。「サツフォ」には感心したかどうか、確かになことは覚えていない。ただあの舞踏会から帰るところに、明け方のパリの光景を描いた、たった五、六行の文章がある。それがうれしかつたことだけは覚えてゐる。

それからアナトオル・フランスの「タイス」という小説を読んだ。なんでもそのころ早稲田文学わせだぶんがくの新年号に、安成貞雄君やすなりさだおが書

いた紹介があつたものだから、それを読むとすぐに丸善へ行つて買つて来たという記憶がある。この本は大いに感服した。（今でもフランスの著作中、いちばんおもしろいのは何かと問われれば、すぐに僕は「タイス」と答える。その次に「女王^{レエン}ペドオク」をあげる。名高い「赤百合^{あかゆり}」などという小説は、さらにうまいと思われない）もつとも議論のおもしろさなぞは、所々しか通じなかつたらしい。しかし僕は「タイス」の行の下^{ぎょう}へ、むやみに色鉛筆の筋を引いた。その本は今でも持つているが、当時筋を引いたところは、ニシアスの言葉がいちばん多い。ニシアスというのは警句ばかり吐^はいているアレクサンドリアの高等遊民である。——これも僕が中学の五年生の時分だった。

高等学校へはいったのちは、語学も少し眼鼻めはながついたから、時々フランス仏蘭西の小説も読んでみた。ただしその道の人を読むように、系統的に読んだのでもなんでもない。手当たりしだいどれでもござれに、ざっと眼を通したのである。その中でも覚えているのは、フロオベルに「聖サンアントワンの誘惑」という小説がある。あの本が何度とりかかっても、とうとうしまいまで読めなかつた。もつともロオタス・ライブラリイという紫色の英訳本で見ると、むちやくちやに省略してあるから、ぞうさなくしまいまで読んでしまう。当時の僕は「聖サンアントワンの誘惑」も、ちゃんと心得ているような顔をしていたが、実はあの紫色の本のごやつかいになつていたのである。近ごろケエベル先生の小品集を読んでみたら、先

生もあれと「サランボオ」とは退屈な本だと言っている。僕は大いにうれしかった。しかしあれに比べると、まだ「サランボオ」なそのほうが、どのくらい僕にはおもしろいか知れない。それからド・モオパスサンは、敬服してもきらいだった。（今でも二、三の作品は、やはり読むと不快な気がする）それからどういう因縁か、ゾラは大学へはいるまでに、一冊も長ちようへん篇へんを読まずにしまった。それからドオデエはその時代から、妙くめまさおに久米正雄と似ている気がした。もつともその時分の久米正雄は、やつと一高の校友会雑誌に詩を出すくらいなことだったから、よほどドオデエのほうが偉く見えた。それからゴオテイエはおもしろがつて読んだ。なにしろ絢けんらんぶそう爛らん無ぶ双そうだから、長篇でも短篇でも愉快だった。しか

し評判の「マドモアゼル・モオパン」も西洋人のいうほどありがたくはなかった。「アヴァタール」とか「クレオパトラの一夜」とかいう短篇も、ジヨオジ・ムウアなぞがかたじけなくなるように、こんぜん渾然玉のごとしとは思われなかった。同じカンダウレス王の伝説からも、ヘツベルはあの恐るべき「ギイゲスの指輪」を造り出している。が、翻つてゴオテイエの短篇を見ると、主人公の王様でもなんでも、いっそう澆漓たる趣がない。ただしこれはずっとのちに、ヘツベルの芝居を読んでいた時、そのへんしゅうしゃ編輯者の序文の中に、ことによるとゴオテイエの短篇が、ヘツベルにヒントを与えたのかも知れないという、もつともらしい説をあげていたから、またゴオテイエを引っ張り出して、その感を深くしたよ

うな次第である。それから、——もうめんどうくさくなつた。

いつたい僕が高等学校時代に、どれこれの本を読みましたと言つたところが、おもしろいことも何もあるはずはない。せいぜい人を煙に捲まくくらいが落ちである。ただせつかくしやべつたものだから、これだけのことはつけ加えておきたい。というのは当時あるいは当時以後五、六年の間に、僕が読んだ仏蘭西の小説は、たいてい現代に遠くない。あるいは現代の作家が書いたものである。ざつとさかのぼってみたところが、シヤトオブリアンとか、——ぎりぎり決着のところと言つても、ルツソオとかヴォルテエルとか、より古いところへは行っていない。(モリエールは例外である) もちろん文壇に篤学の士が多いから、中には *Cent nouve*

Illes Nouvelles du roi Louis XI までも読んでいるという大家がある

かもしれない。しかしそういう例外を除くと、まず僕の読んだよ
うな小説が、文壇一般にも読まれている仏蘭西文学だと言つても
よい訳である。すると僕の読んだ小説のことを話すのは、広い文
壇にも大いに関係があるのだから、ばかにして聞いたり何かして
はいけない。——これでもまだもつたいがつかなければ、僕がそ
んな本しか読んでいないということは、文壇に影響を与えた仏蘭
西文学は、だいたいそんな本のほかに出ないということになりは
しないか。文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影
響も受けていない。ただおもに十九世紀以後の作家たちの影響を
受けている。その証拠には仏蘭西文学に最も私淑している諸先輩

の小説にも、いわゆるレスプリ・ゴオロアの磅ほうはくしているような作品は見えない。たとい十九世紀以後の作家たちの中に、ゴオル精神からほとばしった笑い声が時々響くことがあつても、文壇はそれに唾おしの耳を借すよりほかはなかつたのである。この点でも日本のパルナスは、鷗外おうがい先生の小説通り、永久にまじめな葬列だった。——こんな理窟りくつも言えるかもしれない。だからこの僕の話も、いよいよばかにして聞いてはいけない。

(大正十年二月)

青空文庫情報

底本：「藪の中・将軍」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年5月30日改版初版発行

2009（平成21）年2月25日改版38版発行

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

入力：岡山勝美

校正：坂本真一

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>